

1902年8月，大谷探検隊のロンドン出発

片山章雄

Kozui Otani's Central Asian Expedition from London, Aug. 1902.

Katayama Akio

Abstract

Kozui Otani's Central Asian expedition (or exploration) was started from London on August 16, 1902. It was dealt with in the article "Japanese Exploration in Central Asia" by a correspondent on *The Times*, September 11, which the present author discovered and introduced in 1986. It was referred to by lots of writers, and often overestimated by few of them. Recently the present author has inspected those related newspapers and weekly or monthly publications, and now thinks that the article in question didn't have the original value, for there should be some same handwritings delivered to each publisher. One of them appeared on weekly *The London and China Express*, Sept. 12. The latter had the same title, but was not reprinted depending on the former i.e. *The Times* because of accurate romanization of Japanese name which might be read on the handwriting.

According to further inspection, in a monthly journal there appeared another article closely related to the above two as considered by the same author. It was written by C.L.B. and entitled "The Japanese Archaeological Expedition" in *The Anglo-Japanese Gazette* on Sept. 15. The initial C.L.B. might be Clarence Ludlow Brownell who then in London was an American and famous for his thorough knowledge of Japan. The present author considers that this article contained very important matters to be discussed. Furthermore, there appeared on *The Manchester Guardian*, Sept. 15 a valuable news (without title) concerning Kozui Otani from a London correspondent. Later it was shortened in *The London and China Express*, which was translated far away in Japan. The second correspondent should be considered other than Brownell.

Thinking much of Aug. 16 i.e. the day of the Coronation Review at Spithead, the article on *The Times* should not be overestimated. After enough inspection, we must argue on the historical significance of the Japanese academic expedition (or exploration) in Central Asia reported in the news or publications in Britain and other countries.

はじめに

今から100年前、英国へ留学¹⁾していた浄土真宗本願寺派本願寺（西本願寺）の新門（嗣法）大谷光瑞（1876〔明治9〕年12月27日～1948年10月5日、以下太陽暦採用前は元号優先、採用後は西暦優先、外国人は通例で表示）は、随従者や同派の欧州留学生²⁾とともに、仏教をめぐる歴史的諸問題の研究、さらには中央アジアの地理や歴史の研究に没頭し、隊を編制して中央アジア・インドを探検しようと企画していた。

ウィーンで大谷光瑞に会った地理学者小川琢治（明治3年5月28日＝1870年6月26日～1941年11月15日）は、その後帰国の途につく直前の1901年3月、ロンドンで光瑞に再会してその計画の一端を聞いたと後の回想録に述べている（1936-04-01，68～69頁〔再録＝1941-12-19，152頁〕，以下も使用文献一覧の項に準じて表示）。ヨーロッパを何度も巡遊した大谷光瑞はベルリンを再訪して1901年6月17日（1940-09-30，88頁〔改題再録＝1975-01-03，64頁〕），東洋史学者白鳥庫吉（元治2年＝慶應元年³⁾2月4日＝1865年3月1日～1942年4月1日）と中央アジアの地理について大議論をしたこともあり、そのことが光瑞本人の書簡（1901年6月19日付け藤井宣正・渡邊哲信宛大谷光瑞書簡＝1994-05-18，75頁）や、当時ベルリンに留学中だった国文学者芳賀矢一（慶應3年5月14日＝1867年6月16日～1927年2月6日）の書簡中にも記されている（1901年8月22日付け得能文宛芳賀矢一書簡＝1937-02-06，859頁；1994-05-18，76～77頁）。

以上と相前後する時期における外国の学者との交友についても、ある程度の記録がある。例えば、大谷光瑞が着英半年後1900年9月に渡仏した時、15日と17日にはシャヴァンヌ（Ed.Chavannes, 1865.10.5-1918.1.29）やレヴィ（S.Lévi, 1863.3.28-1935.10.31）との長時間の懇談が記録されており（1900-11-26，30頁），1901年1月下旬、光瑞は上記の小川に会ったウィーンで、到着の翌日に地理学者ペンク（A.Penck, 1858.9.25-1945.3.7）を訪問している（1936-03-01，59頁〔再録＝1941-12-19，138頁〕）。2月17日と18日の両日はパリにおいて帝國大學出身で西本願寺文學寮の元教員だった藤井宣正（安政6年3月2日＝1859年4月4日～1903年6月6日）や蘭田宗恵（文久3年7月27日＝1863年9月9日～1922年1月3日）を伴って先のシャヴァンヌやレヴィと再会、この時もシャヴァンヌ宅と光瑞宿舎のホテルで東洋学に関する長時間の談議があったという（1906-12-01，515～516頁；1940-06-30，91頁〔再録＝1975-01-03，51～52頁〕）。これらは交流や議論の一端でしかないが、大谷光瑞が、仏教・仏典研究から歴史地理の方面にも関心を拡大していったことが窺われよう。歴史地理への関心については、上記の白鳥に会った直後の時点で、英国のR.G.S.（The Royal Geographical Society）かR.A.S.（The Royal Asiatic Society）の機関誌に論文を出そうとしたことが、先の本人の書簡（1901年6月19日付け藤井宣正・渡邊哲信宛大谷光瑞書簡＝1994-05-18，74頁）に記されている。このような歴史地理への学問的関心が、仏僧・求法僧の旅行通過地の踏査、仏教と仏典に関する現地・原典主義と結びつき、また当時盛んに話題になった中央アジア探検を意識して、翌1902年の8月16日⁴⁾，ロンドンから出発して中央アジア・インドへの探検行が開始されるのである。

大谷光瑞の欧州留学に関して、神戸解纜以後インドやエジプトなど渡欧途中における記録や滞欧中における各界名士との交流の記録⁵⁾は少なからずあり、扱うべき材料と問題は本稿で扱う10倍を超えるほどにもなる。それらの提示のためには文献リスト・史料集や別の数稿を用意しているが、本稿では明年が大谷探検隊⁶⁾派遣100年であることに鑑み、探検隊の冷静な評価を求めて歴史の立場から試みている関係記録の掘り起こし作業の中間報告を提示し、表題に限った問題とその周辺のみを扱う。このような限定をするのは、筆者が15年前に発見して紹介した『ザ・タイムズ *The Times*』1902年9月11日12面に掲載された“Japanese Exploration in Central Asia”という記事が、近年過大な歴史的位置付けで扱われているので、それに対する疑念もあるが、また筆者が把握している少なからぬ零細記録の紹介、位置付けの機会を逃すと、100年を経てなお誤った誇張が蔓延るとの懸念があることにもよる。

後に詳述するように、大谷探検隊の出発報道は、英国から、日本人による中央アジア現地探查、さらに踏み込んで言えば日本人による中央アジア地域での考古学的活動が、世界に向けて報道されたおそらく最初であろうと考えられる。この意味からも、日本の中央アジア現地研究の嚆矢として可能な限り正確に跡付けておく必要がある。関係記録については、歴史的評価をめざすとしながらも唯一の記録、すなわち上記の『ザ・タイムズ』の記事のみに依拠して提示された解釈や意味付けがこれまでにあったが、本稿ではそのような立場は採らず、可能な限りの独自の作業から関係記録を探索し、その背後もできるだけ実証的に追跡することを主眼としている。それは、この探検時期にも、またその前後の時期にも、極めて広域に足跡を残した大谷光瑞という人物とその学的関心、さらには関係報道を、直視して評価することが不可欠な作業と考えられるからである。

『ザ・タイムズ *The Times*』の報道、その評価と問題点

1986年、筆者は大谷探検隊のロンドン出発に関わる重要な記録として、上述のように『ザ・タイムズ *The Times*』1902年9月11日12面に掲載された“Japanese Exploration in Central Asia”という、横6段組紙面中の左から4段目下端に位置する全44行、総計399語の記事(図1)を紹介した(1986-12-30, 30頁)。この記事は、単に拙文掲載誌の読者に知られただけではなく、後に新聞記者や研究者によって少なからず言及あるいは再紹介され(1987-06-12, 7面[再録=1990-04-05, 88頁]; 1991-01-07, 7面[再録=1992-08-12, 37頁]; 1991-03-30, 8, 21~22頁; 1992-12-25, 154~155, 209, 210頁; 1993-02-18, 17面; 1994-04-20, 2面; 1995-03-10, 34頁; 1996-08-01, 102, 106頁; 1997-09-//, 83~84頁; 1998-06-08, 9面; 1998-06-15, 9面; 1999-10-23a, 140頁; 1999-11-08, 1面; 2001-03-15, 横24, 29頁)、また筆者自身も何度か言及することになった(1987-08-01a, 103~104頁; 1987-08-01b, 95頁; 1999-10-23b, 147頁; 2001-04-20, 30頁)。

これらの言及・紹介・利用は、筆者分の自己評価は別にしても、現時点では大半が穏当な扱いだったと考えられる(1987-06-12, 7面[再録=1990-04-05, 88頁]; 1991-01-07, 7面[再録=1992-08-12, 37頁]⁷⁾; 1991-03-30, 8, 21~22頁; 1997-09-//, 83~84頁; 2001-03-15, 第75輯(2001)

JAPANESE EXPLORATION IN CENTRAL ASIA.—A correspondent writes:—“Japan gives frequent instances nowadays of her desire to ascertain the truth in all things. One of the most interesting of these is the archaeological expedition which has just left for Central Asia under the management of Count Otani Kozui and M. Watanabe Tetsushin, both members of the Japan Society. Count Otani is also a member of the Royal Geographical Society. The purpose of the expedition is to search for the Buddhistic remains in Central Asia, India, and China, and to trace as far as is possible the course of Buddhism from its source northwards and eastwards to Japan. The members of the party, seven in number, are all Japanese. Count Otani's father, Otani Kozon, now living in Kioto, is Lord Abbot of Nishi Hon-gwan-ji, the monastery of the ‘Original Vow,’ and a direct descendant of Shinran, the richest founder of the Shin Shin sect, who lived in the 11th century. Count Otani Kozui has been an extensive traveller, and was elected a member of the Royal Geographical Society because of his explorations in China. His father sent him to Jerusalem to study Christianity and Mahomedanism, and on his own initiative he visited Iceland and spent the best part of a year in the Arctic circle. He is an enthusiastic student of Sanskrit and ancient Chinese, and has done much original work in the Oriental room of the British Museum. All the members of the expedition have been preparing for this work for several years. M. Watanabe Tetsushin has been studying Church history with a priest of the Church of England, and has paid particular attention to the Nestorians who wandered from Constantinople off into Asia in the fifth century. He lived in St. Petersburg one year and speaks Russian fluently. M. Hori Masuo, who will look after the surveys and the map-making, has been studying topography in Oxford. M. Inongo Koen, a veteran of the Chino-Japanese war, in which it will be remembered the Japanese showed wonderful ability in matters of transport, will have charge of the *impedimenta*. M. Fujii Sensho, Ph.D., is well versed in Chinese and Japanese Buddhistic literature. He has been studying Sanskrit in Berlin and Paris, and has already been several times to India. Though the amount of money that Nishi Hon-gwan-ji can put at their disposal is practically unlimited, M. Watanabe does not expect the cost to be excessive.”

図1. “Japanese Exploration in Central Asia”, *The Times*, 1902.9.11, p.12. (東海大学図書館所蔵)

横24, 29頁)。しかし、そのような扱いのみではなかった。当初は先の『ザ・タイムズ』を見て自らが驚いたことを吐露したような、ある意味では穏当な扱いをした論者によって、いつの間にか『ザ・タイムズ』が驚きを以って報道したという位置付けが繰り返されるに至ったのである。すなわち、「私はこの『タイムズ』の記事を初めて目にした時、……自信に満ちた日本の青年の姿があったことに驚いた」(1992-12-25, 209頁)と書かれていたのが、後に「『タイムズ』は……驚きをもって伝えた」(1993-02-18, 17面), 「大きく報道したように……大変な驚きであった」(1994-04-20, 2面), 「驚きをかくさず報道した」(1995-03-10, 34頁), 「驚きをもって報道した」(意外性に驚いた当時の『タイムズ』)(ともに1996-08-01, 102頁), 「驚きをかくさなかったように」(1996-08-01, 106頁), 「驚きをもって報道した」(驚きからであった)(ともに1998-06-08, 9面), 「意外性に驚いた当時の『タイムズ』」(1998-06-15, 9面), 「驚きを隠さず報道したように」(1999-10-23a, 140頁)というような歴史的評価が付され、ついには全国紙第1面の無記名コラムに「英国の新聞『ザ・タイムズ』が、日本人だけで編成された内陸

アジア探検隊のロンドン出発を、驚きと共に報じたのは1902年9月11日のことだった」(1999-11-08, 1面)と書かれる状況が出現した。

筆者は当初から、この『ザ・タイムズ』の記事はきわめて重要なが、しかもなお検討すべき問題を含んでいると考えていて、発見・紹介以後も努めて冷静に扱うように配慮したつもりであり、またその検討すべき問題の一部についてはすでに扱ってもある。すなわちそのひとつは、図1にも見えるように、隊員の1人井上弘圓(明治5年10月28日=1872年11月28日~1939年11月18日)が“Inongo Koen”とされていることに関連してである。かつてこの箇所が「Inoue Koen」(1992-12-25, 209頁)と根拠なく現代風に改変して扱われたことも知ってはいるが、筆者はそのような表記は正しくないと継続して考えていて、1999年には、「Inongo」は「筆記体Inouyeによる誤り」(1999-10-23b, 147頁)と推測しておいた⁸⁾。いまひとつの重要な問題は、8月16日の出発に対して『ザ・タイムズ』の記事掲載が遅い、遅すぎるということである。筆者はこの点からも、「驚きをもって報道した」にしては遅すぎるので、そもそも「驚きをもって報道した」と評価することに与しない立場を採ってきた。8月16日がどのような日だったかについては、最近の一文中で簡単に示しておいた⁹⁾が、また後段でも扱うこととする。

『ザ・タイムズ』の記事について、逐一検討すれば必ずや言及しなければならないことは少なくない。いくつか例示すれば、すなわち伯爵襲位以前の大谷光瑞に“Count”が付されていること、真宗を“Shin Shin”と誤り¹⁰⁾親鸞(承安3年[≒1173年]4月1日~弘長2年[≒1262年]11月28日)の生存世紀を“11th century”と誤っていること、隊員の堀賢雄(1880年12月5日~1949年9月20日)を“Hori Masuo”と表示していること(これを根拠に近年は「ますお」という読みが有力になっている)¹¹⁾、隊員の藤井宣正に関する“Ph.D.”の学位やベルリン・パリでのサンスクリット研究と数回のインド行の記載、等々である。これらの問題については別途機会を得て論じることであろう。本稿では上掲の『ザ・タイムズ』の記事のみが紹介・利用されているという状況から脱却するとともに、『ザ・タイムズ』の扱いやその評価に警鐘を鳴らすことが必要と筆者が考えて進めた作業の一成果、すなわち『ザ・タイムズ』と対照・検討できる若干の記事の確認、ここから論を進めることとする。

『ザ・タイムズ』と前後する記事、関係する記事

『ザ・タイムズ』の記事は、その少し後、すなわち約40日後に日本でも抄訳・紹介されている(1902-10-23, 2面)が、それを別にしても、英国でこの記事に前後する記事や関係する記事が全くないわけではない。大谷探検隊に関する*The Geographical Journal*や*Dr. A. Petermanns Mitteilungen*などの専門誌の雑報まで拾っている中央アジアの探検史の専著¹²⁾、あるいはザ・タイムズの主任報道員による好著との評判がある書物¹³⁾においても、この『ザ・タイムズ』の記事は言及すらされておらず、これに前後ないしは関係するような記事が取り上げられたこともなかった。しかし、前後ないし関係する記事がないと確定されたわけではない。筆者が上記記事を発見・紹介して以後、この方面の追跡がなされないまま、『ザ・タイムズ』の記事のみが第75輯(2001)

上記のように過大に評価されてしまったところにこの記事の不幸があるともいえるが、もちろんそれは論者の罪であろう。

現時点で筆者が把握している探検隊出発後の最も早い記事は、1902年8月22日付けの、巻号表示をもちながら題字中央に「新聞紙」との漢字表記もある週刊新聞、『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス *The London and China Express*』に掲載されたわずか3行、26語のそれである（1902-08-22, p.674）¹⁴⁾。そこで大谷光瑞を“traveller”, “geologist”と表現していることは興味深いが、それは別にしても、ヴィクトリア停車場から公使館関係者に見送られたことは、『新西域記』上巻所収の隊員本多惠隆（1876年10月30日～1944年5月18日）の日記（1937-04-10 [復刻 = 1984-11-12], 3頁）にも見えているところである。隊員側の記載と一致するこのような記事を掲載したこの週刊新聞を確認していくと、その9月12日付け紙面の“Japanese Exploration in Central Asia”という、先の『ザ・タイムズ』と同題、ほぼ同文の記事（1902-09-12, Supplement p.4）に行き着く。こちらはもちろん改行箇所は異なり42行で、カンマの相違を除くと、前者の本文6行目の“, both members of the Japan Society”, 7行目の“also”, 9行目“the”が後者にはなく、また前者13行目“Kioto”が“Kyoto”, 16行目“richest”が“rich”, 34行目“Inongo Koen”が“Inouye”になっているという関係で、総計390語である。

先に発見・紹介した『ザ・タイムズ』の記事に加え、この『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』の記事を確認・対照することは、若干の問題を解決するとともに、新たな疑問を見出すことにもなった。

後者の記事によって解決された問題とは、前者の“Inongo Koen”の“Inongo”が、後者のように“Inouye”でよいとすれば、正しく「井上」に一致すること、すなわち筆者のかつての推測（1999-10-23b, 147頁）が妥当だったということである。しかし一方、新たに出現した疑問は、9月11日の『ザ・タイムズ』と翌12日の『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』は酷似しているとはいえ、後者が前者に依拠したものならば、なぜ「井上」の綴りが直っているのかという問題である。

この問題を考えるには、『ザ・タイムズ』や『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』の原稿がどのようなものだったかを考慮しておく必要がある。すなわち、筆者の解釈では、前者においては手書き筆記体の原稿が“Inongo”という誤りを出現させたと推定するのだが、その場合、後者が前者掲載記事を直接の情報源としていて原稿というべきものが実質的になかったとすれば、後者で正しく“Inouye”となることはまず不可能に近い。前者の情報源が手書きで“Inouye”だったところ、さらにタイプライター等による“Inongo”を含む原稿が介在し、それによって前者の最終的紙面が誤った場合も、後者で直ることについては同様となる。そこで、手書き筆記体の原稿が複数存在し、それらが複数の社に渡ったという場合を考えると、前者すなわち『ザ・タイムズ』は誤読して“Inongo”としてしまい、後者『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』は正しく判読して“Inouye”とした、という可能性が考えられる。以上のいくつかの場合やそれ以外の場合を考慮しようとすると、ともに記している“correspondent”の存在が留意され、その人物に見通しがつけば、上記のうち「手書き筆記

体の原稿が複数存在し、それらが複数の社に渡ったという場合」の可能性もさらに検討できよう。当時の新聞・雑誌の検索からその糸口をたどることは、不可能ではないと考えられる。

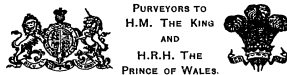
『ザ・タイムズ』等諸紙の情報源に関係する月刊誌記事とその記者

先にも述べたように、『ザ・タイムズ』の記事の周辺に対する追跡は、管見の限りこれを知らない。ところが、当時ロンドンで発行されていた新聞や雑誌をある程度検索していくと、重要な雑誌記事に遭遇した。以下にその記事の紹介と検討、さらに記者に関する検討を抜かう。

1902年9月15日発行の月刊誌『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ *The Anglo = Japanese Gazette* (日英新報)』第1巻第3号の冒頭には、“The Japanese Archæological Expedition”と題する記事が掲載され、記事末尾にはC.L.B.という表記がある(1902-09-15a, pp.37-38)。記事は左右2段の組み方で87行、総計740語である(図2)。注目すべき箇所は

THE ANGLO-JAPANESE GAZETTE

Vol. I.—No. 3.		SEPTEMBER 15, 1902.		PRIOR SIXPENCE.	
CONTENTS.					
	PAGE		PAGE		
The Japanese Archæological Expedition	37	General Notes	46		
Outlook in Japan	38	The Japanese Government Steel Works at Wakamatsu	48		
Dividends and Reports	39	The Takasima Coal Mines	48		
Japanese Banking	39	British Industries.—I.	51		
Great Britain and Japan	41	Mitsui's Bank	52		
The Trade of Korea for 1901	42	Passenger List	52		
Japanese Art Work at the Wolverhampton Exhibition	43	The Railways of Korea	53		
Sawmill Engineering in Japan	44	The New Customs Rates	55		
The Mayoral Garden-party at Portsmouth	45	Japanese Exhibition at Birmingham	55		
Reported Embassy for Japan	45	Stock and Share List	56		
		Shipping News	56		



Sloe Gin,
Cherry Brandy, Cherry Whisky,
Apricot Brandy, Peach Bitters,
and other Liqueurs.

COLLIER & CO.,
PLYMOUTH,
ENGLAND.



図2. (C.L.B.), “The Japanese Archæological Expedition”, 『*The Anglo = Japanese Gazette* (日英新報)』, Vol.I, No.3, 1902.9.15, pp.37-38. (筆者所蔵，本図版の複写配布・転載を禁止する)

多々あるが、まず表題のように、日本人による考古学的探検、しかも中央アジア地域の考古学的探査というテーマが、英国の首都で発行されていた月刊誌の巻頭を飾ったことであろう。そしてこの一文を読み進むと、先の『ザ・タイムズ』や『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』の記事と共通する箇所が確認される。すなわち、冒頭からの全体的論調、親鸞の直系との言及、“Shin Shu”として真宗に言及していること、隊員井上弘圓を正しく“Inouye Koen”¹⁵⁾としていること、探検資金に関する先の2記事の末尾4行に対応する箇所も「探検の」という補足と動詞・形容詞各1箇所が類義語となっているだけの相違で、比較すると月刊誌記事の方がかなりの長文という関係であるが、この一文と先の新聞記事の深い関係は否定できない。もちろん、ここでも大谷光瑞に“Count”を冠していること、隊員堀賢雄を“Mori Masao”としているような誤りもあり、また光瑞がThe Meteorological Societyの会員であること、その他この記事によって初めて知られることもあって、この記事そのものについての検討が必要である。しかし、それらの諸点をも含め、現時点で判明した三者、すなわち3紙誌の関係は検討に値する。

さて、それでは実際のところ、三者はどのような関係にあるのだろうか。もし2紙の記事を見て月刊誌の一文が書かれたのであれば、掲載からきわめて短期間に大幅な加筆をした原稿が作成され、月刊誌の版組みを変えて掲載号冒頭に入れたことになるだろう。このようなことはほとんど不可能で、しかも2紙双方ないしはそれらのうち後者を参照したとして“Inouye Koen”の説明はついても、ともに“Hori Masuo”としているものが“Mori Masao”となっていることの説明がつかない。既掲載の記事を倍増させるほどの加筆が可能なC.L.B.なる人物がいたと考えるのも一解釈だが、それよりはこの件に通じたC.L.B.なる人物がいて、月刊誌に手書き筆記体の原稿を渡した後、間もなく掲載号が発行されるという9月上旬、より限定すれば週刊新聞の掲載号の前号の発行日9月5日あたりから10日までの間のどこかの時点で、手書き筆記体の抄録原稿が複数作成されてそれが先の2紙にも流れ、一方では11日に“Inongo”という誤読を含んで掲載され、また他方では翌12日に正しく“Inouye”となって掲載される、すなわちともに月刊誌よりも先に発行されるに至った、こう考えてほぼ誤りないと思われる。そして月刊誌の記事には別個の誤植である“Mori Masao”や“Sven Hadin”という表示が残ったのであろう。

このような情報に通じていたC.L.B.とは何者か。この人物については、この月刊誌を数号確認するだけで、Clarence Ludlow Brownellという人物が浮上してくる。例えば同年7月15日発行の同誌第1巻第1号にはフルネームで“The Japan of To-day” (pp.5-6) という一文を書いていて、さらに10月15日発行の同誌第1巻第4号にはC.L.B.で“The House Tax Question” (pp.57-58) という一文を書き、また同号にはS.N.なる人物によるClarence Ludlow Brownellの著書*The Heart of Japan*の紹介・要約 (pp.73-74) があることから、問題としているC.L.B.も、きわめて日本通のこの人物が想定されるのである。そして同年におけるこのブラウネルの日本に関する公表物を調べると、1902年4月9日、Hanover Squareで開催された倫敦日本協會¹⁶⁾ (The Japan Society, London) 第58回 Ordinary Meeting (Fifth of the Eleventh Session) において読まれた“Hongwanji and Buddhist Protestantism in Japan”なるペーパーが確認され、また

このClarence Ludlow Brownellが米国人であることも知られる。この報告の概要は3か月を経ずして日本にも伝わり、「シー、エル、ブラウネル」の表示で宗教新聞に掲載（1902-07-05, 3面）され、ペーパーの全文に図版と討論概要を付したものが1906年に公刊されている（1906-//-///, pp.68-87）。この論文を一読すれば、そこで大谷光瑞の父光尊（嘉永3年2月4日＝1850年3月17日～1903年1月18日）が言及されていること、さらに光瑞本人が倫敦日本協會の会員であること等々の記載も含め、日本通、というよりまさに本願寺通というべき人物ブラウネル、すなわちClarence Ludlow Brownellの理解の程度が窺われ¹⁷⁾、この人物こそが間違いなく『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の記事、日本人にとっては記念すべき中央アジアにおける「日本人による考古学的探検」の記事を書いた著者C.L.B.その人だと確信されるであろう。そしてこの人物が、『ザ・タイムズ』や『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』に抄録原稿を直接渡したか否かは別としても、抄録原稿が結果として2紙に渡ったことは疑いない。

それでは、ブラウネルすなわちClarence Ludlow Brownellとはどのような人物だったのであろうか。この人物は、すでに一部の人名録に登載されていて、日本でも専論と人名辞典中の項目がある。ただしこれまでの記載では、上記文献との関係が明示されていないようである。これらを含めて概略を述べておこう。

ブラウネル、すなわちClarence Ludlow Brownell（1864.6.6-1928.2.2）は、1886年11月あるいは1887年1月から同年7月まで当時の東京専門學校（現早稲田大学）で教壇に立ち¹⁸⁾、その後1888年11月から1890年3月31日まで旧制富山中學（現富山高校）に勤務、さらに同年9月には福井の尋常小學校に勤務したとされる¹⁹⁾。日本を離れてからの動向は米国の百科事典や人名録²⁰⁾を参照する必要がある、それらにも言及した専論もある²¹⁾。ただしロンドン在住時期の上述の日本協會での報告やそれに関する本邦での新聞記事、上記の英文月刊誌への関与については、これまで指摘や研究はなかったようである。日本通・本願寺通であったことは確かで、また後に通信員を兼ねた経歴もあるから、『ザ・タイムズ』や『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』に情報を流した可能性は十分考慮すべきであっても、逆に否定される要素はなからう。

月刊誌記事の問題点

さて、月刊誌『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の記事には、これだけでは完結しない問題点がいくつかある。次にはこれらを検討しなければならない。

単純なミスや誤解については、訂正を列举すれば事足りようが、他の記録と対照しなければならない箇所もいくつかある。大谷光瑞の中央アジア探検、大谷探検隊に関して、特に最初の1902年からの調査活動に直接助言し影響を与えた人物は誰だったのかという問題がある。この点に示唆を与えるのが、記事の最後から2つ目のパラグラフに見える2人である。

1人の“Sven Hadin”とは、もちろん誤植で正しくは“Sven Hedin”，中央アジアの探検家として著名なスウェーデン・ヘディン（1865.2.19-1952.11.26）である。そして、大きな問題は、大谷第75輯（2001）

光瑞は1902年8月の探検出発前にヘディンに会っていたか否かという点、また、そのことにも関係するが、2人の最初の会見はいつかという点、これらの2点はこれまでも重要な問題とされたことがあった。

1991年、作家による大谷光瑞伝の新聞連載中に、大谷光瑞が1901年6月20日、中央アジアの探検出発を4日後に控えたヘディンをストックホルムに訪問したとの誤った記載があり、2人の会話まで示されたことがあった（1991-03-01，15面）。筆者は月刊誌において、1901年であればヘディンは1899年から1902年まで継続した中央アジア探検中でストックホルムにはおらず、また6月24日を出発日としたのは実際は1899年でその年ならば大谷光瑞は日本にいたので、作家のまことしやかな記述が不可能であることを指摘し、同時に1902年における大谷光瑞とヘディンの関係の最大の問題は、7月25日のヘディンのストックホルム帰着以後、8月16日の大谷光瑞のロンドン出発までの3週間（約20日間）、この期間に2人が会ったか否か、関係記録の追跡が必要だと指摘しておいた（1991-06-12，80頁）。作家の新聞連載は後に「丸写し」「酷似」「盗作」と見出しに書かれるような問題を起こして注目され²²⁾、また月刊誌における筆者の指摘もある程度の関心を促したためか通俗的書物（1992-05-05，32～33頁）で無断引用されたが、最も検討を要する問題、すなわち上述の3週間ないしは20日間の記録については、その後に十分な追跡や議論がなされなかった。

一見すると、今回の『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の記事の出現によって、大谷光瑞は1902年7月から8月のどこかの時点でヘディンに会ったように解釈できる。大谷光瑞からヘディン宛の書簡・電報計8通は、現在もストックホルムのスウェーデン国立民族学博物館に所蔵されており、その年代も1904年3月24日から1921年4月21日に渡っていることは知られているが、この間の1908年11月から12月、光瑞は来日したヘディンを西本願寺の関係者ともども最大限に歓待しており、そのことに対する1909年1月26日付けのヘディンの両親から大谷光瑞宛の礼状があった。現在は雑誌掲載のその訳文だけしか確認できていないが、そこには「…我等兩人ハ閣下カ愛子滞在中ニ示シ給ヒシ御厚誼ヲ奉謝候ト同時ニ亦閣下カ彼ノ大膽ナル探險家ニ對シ未タ相見サル以前ヨリ多大ノ注意ヲ以テ日本ニ御紹介ノ榮ヲ賜ヒ候……」とあり（1909-03-13，15頁）、1908年の会見が最初のようにも判断される。『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の記事は、1902年のロンドンにおいて、大谷光瑞やその周辺に深く関与していたブラウネルが書いたもので、それゆえに盛りだくさんの話題と、例えば会見の願望や予定の話題が錯綜して文章に混入したという疑いもあろう。この点に関しては、上述の来日時の報道や礼状ともども、なお関係記録の探索と対校が必要と考えられる。現時点では結論を出せないが、この記事が検討に値するものであることは確かである。

もう1人のCaptain Deasy、すなわちディージー²³⁾（1866-1947）は、大谷光瑞の探検に確実に助言を与えた人物として重要である。1896年から1899年まで新疆とチベットの探検に従事し、光瑞が1900年3月19日にロンドンに到着した少し後には、このディージーの英国帰着、さらにはR.G.S.においてGold Medalを受けたことがロンドンで報道されている。その著書*In Tibet and Chinese Turkestan*は帰国の翌年、すなわち1901年に刊行された²⁴⁾。このディージーが大谷光瑞の探検に大きな影響を与えたことは、ほとんど忘却されていた。関係記録としては、第1

次探検隊の大谷光瑞と堀賢雄から英国 *The Geographical Journal* に送られた複数の通信文をまとめた雑報中で“Deasy” (1903-11-//, p.567), 第1次隊員渡邊哲信 (1874年9月12日～1957年3月17日) の日記の公刊分の8箇所「デージー」 (1937-04-10 [復刻 = 1984-11-12], 254～256, 263頁), 第2次と第3次の探検の橋瑞超 (1890年1月7日～1968年11月4日) の新聞連載 (後に単行本に再録; 単行本再録, 復刻, 現代語訳文庫化あり) で「デジー」 (1912-08-07, 1面 [再録 = 1912-12-28, 179頁; 単行本再録 1937-04-10 [復刻 = 1984-11-12], 770頁では誤って「ボジー」; 復刻 1988-09-20, 179頁; 現代語訳文庫 1989-06-10, 131頁では「デージー」]), 上原芳太郎の回想文中に「デーシー」 (1939-08-01, 61, 63頁) と記され, 探検から30年も後に上海で大谷光瑞と面談した芳村修基 (1908年2月20日～1971年8月16日) の回想文中に, 光瑞が評価したその著と推測される書名『チベットとシナ・トルキスタン』 (1964-03-//, 34頁) が現われている。ディージーについては, 以上の指摘のごく一部について, 最近になって2度ほど言及されたことがあるのみである (2001-03-15, 横30頁註 (40); 2001-04-20, 30～31頁)。これらわずかな散在記録と近時の言及があるだけだが, 例えば上原の回想文の「愛蘭の富家の出たるキヤブテン・デーシーは, 夙に新疆探検家として名を馳せ, 英國地學協會の金牌受領者であるが, 門主と意氣投合し, 我が探検の要具一切は, 同氏の紹介を以て, ネビー・アミー百貨店に調製せしめられた。」 (1939-08-01, 61頁, 「ネビー・アミー」は正しくは Army and Navy であろう) という一節から冷静な判断を下せば, ディージーが大谷探検隊に与えた大きな影響の一端を知ることができると同時に, 『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の記事の関係個所の信憑性と重要性が判るであろう。

これまで, 大谷光瑞の探検, 大谷探検隊の出発前のこととして, ヘディンやスタイン (A.Stein, 1862.11.26-1943.10.26) の影響, 2人との会見が出典なく記されたことが幾度もあった。また, お雇い外国人でもあった地震学者で1902年当時は英国にいたジョン・ミルン (J.Milne, 1850.12.30-1913.7.31) の影響が, 大谷光瑞と隊員3名がミルン夫妻とともに写っている写真から強調されたこともあった (1993-02-18, 17面)。この他に, 当時英国にいたクロボトキン (P.A.Kropotkin, 1842.12.9-1921.2.8) と交遊があり, 「中央アジア方面の地理について, 多大の助言を与えてくれた」と回想文中で書かれたこともあった (1973-08-15, 23～24頁 [再録 = 1978-04-15, 212頁])。

1902年8月16日の大谷光瑞のロンドン出発前, 特に探検に関連してヘディンとの会見や関係があったか否かはすでに述べた問題だが, 例えばスタインとの直接の交流関係についても具体的記録は提示されていない。探検に限定して, ミルンに「アドヴァイスを求めた」 (1993-02-18, 17面), あるいは「ミルンの助言をえて探検隊を組織し, 翌一九〇二年, 一挙に仏教東漸の道へと乗り出していった」 (1996-08-01, 104頁) などとされたこともあったが, いずれもミルンの来日時 of 欧亜横断踏査歴, および光瑞がミルンと一緒に写っている写真から推測して繰り返して述べているだけであって, 明瞭な記録は示されていない。別に詳論するが, ロンドンにある記録によると大谷光瑞と上記の隊員3名 (藤井宣正・渡邊哲信・井上弘圓) は, 1902年5月3日にワイト島のシャイドにあったミルンの「地震」観測所 (observatory) を訪問しているという。しばしば目にする件の写真は, 「1901年頃」 (1992-12-25, 口絵; 1993-02-18, 17面; 他) と第75輯 (2001)

されることが多かったが、その根拠は示されていないので、筆者は暫定的に件の写真を上記年月日に撮影されたものと考えておく。大谷光瑞の当初の探検出発予定はその2か月後、延期された戴冠式の参列を済ませ実際の出発は3か月半後である。この間における外部者の取材や関係者の回想のごく一部だけが公表されていると考えられる現状で、ディージーは複数回現われているが、ミルンに関する文言は一度も示されていないのである。それゆえ、探検に限定してミルンの関与を高く評価することは現時点で根拠がないことになる。

クロボトキンとの関係については、現時点では大谷光瑞が随員が帰国後に周囲に語ったことが推測される程度の記録であることを再確認し、今後の検索に待ちたい。

以上、月刊誌『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の記事を含め、大谷光瑞がロンドン出発前に大きな影響を受けた探検家として、ディージーがかなりの程度重視されるべきで、ヘディンは保留するにしても、スタインは相対的に後退し、ミルンも大きく後退することになろう。

在ロンドン通信員発の地方新聞記事

1902年9月15日、すなわち上述の『ズィ・アングロ・ジャパニーズ・ガゼッティ』の発行日と同日に、『ザ・マンチェスター・ガーディアン』という有力地方紙は、見出しこそないが大谷光瑞に関するかなり長文の記事を掲載した(1902-09-15b, p.4)。ここで初めて指摘する71行、545語のこの記事²⁵⁾の価値を直ちに全面的に論ずるのは時期尚早だが、この記事を、先の『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』紙は4日後の19日に、出典の紙名のみ表示し日付を示さず抄録した(1902-09-19, p.738)。抄録では全32行、第1センテンス末尾に“writes the *Manchester Guardian*”とあるのを除外すると308語となっている。そして前者ではなく抄録の後者の記事を、その名を明示しないで日本で翻訳紹介したのが、約1か月半後の「嗣法猊下に對する英字新聞」という記事である(1902-11-05, 12頁)。先に『ザ・タイムズ』の扱いで穏当と考えられる区分に入れた1991年の『京都新聞』の記事とその再録(1991-01-07, 1面[再録=1992-08-12, 37頁])²⁶⁾は、この『ザ・マンチェスター・ガーディアン』の抄録に依拠した「嗣法猊下に對する英字新聞」を参照しつつ、その「英字新聞」を『ザ・タイムズ』と思い込んで扱ったのであろう。

さて、『ザ・マンチェスター・ガーディアン』の記事について、初歩的な問題を扱っておこう。まずこの記事を通読して気付くのは、大谷光瑞に関して、すでに紹介した同年春以来の講演ペーパーや新聞・雑誌記事にはあった西本願寺の新門、時の門主大谷光尊の子(1906-/-/-/, p.71; 1902-09-11, p.12; 1902-09-12, Supplement p.4; 1902-09-15a, p.37)だと言及が全くないこと、英国・ロンドンにおける位置を示す“the Japan Society [, London]”(1906-/-/-/, p.71; 1902-09-11, p.12; 1902-09-15a, p.37)、さらには“the [Royal] Geographical Society”(1906-/-/-/, p.71; 1902-09-11, p.12; 1902-09-12, Supplement p.4; 1902-09-15a, p.37)、あるいはまた“the Meteorological Society”(1902-09-15a, p.37)の会員だということへの言及も全くないこと、等々が留意されよう。また、探検を扱った9月の3記事との関係に限っても、そ

れらにある日本人の隊員に関する記載（1902-09-11, p.12；1902-09-12, Supplement p.4；1902-09-15a, pp.37-38）が全くないこと、3記事における探検対象地域が、中央アジアを筆頭にしながらも明瞭にインドを含めているのに対して、『ザ・マンチェスター・ガーディアン』の記事では別の文脈でしかインドに言及していないこと、探検に助言を与えた探検家として、3記事中の月刊誌記事に見えるヘディンやディージーへの言及はなく、却ってヴァンベリー（A.Vámbery, 1832-1913.9.15）が挙がっている。これらのことや文章全体のトーンから総合的に判断すると、“Our London Correspondence”の著者（通信員, correspondent）とは、現時点で先の3記事の著者と断定してかまわない上述のブラウネルとは、少なくとも別の人物であると推測される。この著者の追跡は、後日に残された課題であろう。

以上、『ザ・マンチェスター・ガーディアン』の記事に関して、現在筆者が考えているところを記した。これらのことから、1902年8月の大谷探検隊のロンドン出発の時期に、ロンドンにおいて、ブラウネルと別にもう1人、大谷光瑞の探検を扱った記事を執筆して有力紙に送るような人物がいたことが明らかになったと考える。

おわりに——1902年8月16日の探検出発——

これまで、大谷光瑞を主導者とする大谷探検隊のロンドン出発をめぐる諸記事を軸に検討を加えてきたが、最後に、出発日の1902年8月16日とはどのような日だったか、この点について簡略に確認し、あわせて本稿のまとめを試みる。

大谷光瑞の滞欧2年半の動向の追跡と検討は、別の数稿に譲らざるを得ないし、当初戴冠式が予定されていた6月から探検出発が予定されていた7月初めにかけての動向も、ここでは割愛する。ロンドンや各地における戴冠式のための装飾は、6月26日の式が延期されるということによってある程度地味になったが、6月時点で渡英していた各国・各植民地からの参列者のうち滞在を延期するものも少なくなかった。新聞や雑誌も予定日よりかなり前から紙面を割き、延期とエドワード7世の盲腸炎手術の報道の後、王の回復が明瞭となるにしたがって8月の戴冠式が確定する。英国の新聞・雑誌はもとより、日本の紙誌においてもかなりの速さでロンドン電がしばしば報じられた。日本からは伊集院五郎が乗った浅間と高砂の2艦が6月10日に着英しているが、その往路各海域・各地の写真は博文館の週刊誌『太平洋』に8月4日以後連載されている。

8月9日（土曜日）のウエストミンスターにおける戴冠式の推定イラストは、式の前から英国の紙誌に掲載され、式の直後には臨場感溢れるイラストや写真も掲載された。*The Illustrated London News*や*The Graphic*その他の週刊誌は週末通常号の他に臨時号を出している。16日（土曜日）は戴冠式の1週間後で、ポーツマス近くのスピットヘッドで観艦式が挙行される日で、取材とその報道・掲載は紙誌とも翌週まで一連の式典を大きく扱っている。日本艦2隻の乗組員1100余名、さらにはかなりの数の在英公使館関係者・滞英者が観艦式に行ったと考えられる。14年後、元大阪毎日新聞記者の關露香が伝記風の『大谷光瑞』を書いた時、三宅雪嶺はその書に序を寄せているが、三宅は世界一周中の1902年、この8月16日にはスピットヘッド観艦式第75輯（2001）

の高砂の甲板上にいたことが、撮影した写真を巻頭口絵に収めた著書『大塊一塵』（政教社、1904年）によっても判明する。

1902年8月16日とは、以上に扱ったわずかな事実からも十分に推知できるように、英国にとっては当時最大の式典が続き、取材も報道もそこに焦点を当てていた時期に重なっているのである。したがって、『ザ・タイムズ』の記事掲載が遅い、遅すぎると先に述べた背景も自明となろう。大谷探検隊を「驚きをもって報道」したというような評価は全く当たっておらず、逆に短文ながら『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』は出発後の最新号である8月22日号で扱っている点に価値を認めるべきであろう。また、滞英中の日本通・本願寺通の米国人ブラウネルの大谷光瑞ないしはその周辺への取材と原稿内容から判明するその見識、抄録原稿の作成は、大谷探検隊のロンドン出発に関する複数の記事を残すことになった。これはさらに評価に値いしよう。一方、『ザ・マンチェスター・ガーディアン』の在ロンドンの通信員、上記ブラウネルとは別人でかなりのレベルの記事を書いた不明の人物の存在も、あらためて留意する必要がある。その記事を抄録して残したという点では、再度『ザ・ロンドン・アンド・チャイナ・エクスプレス』を評価するべきであろう。

1902年8月16日の大谷探検隊のロンドン出発に関しては、近年繰り返し書かれてきたように『ザ・タイムズ』の記事に過大な評価を与えるのではなく、関係しそうな紙誌を十分に検索し、文献上議論が成り立ちうる状況下で検討を加える必要がある。筆者は、本稿において十分な作業が完了しているとは思ってはならず、なお今後に残すことも少なくないと考えている。日本人による中央アジアの現地探査・考古学的活動の端緒と考えられる大谷探検隊の報道に関して、探検出発100年に垂んとする時に、この問題をめぐってさらなる資料が探索され、また解釈や位置付けが進展することを望みたい。

使用文献一覧

※大谷探検隊に関係する新聞記事や雑誌雑報、論文・書物などの文献の総数は、4桁をもって数える段階に至っている。筆者はそれらを1902-09-15aのように下線を付した発行年月日（時にa,b等を付す）で略号化して蓄積・配列し、出典や参照の表示にも使用しているので、一連の作業に関わる本稿においても同様とする。本稿の使用文献の大谷光瑞・大谷探検隊関係分は以下に列記するもので、関係箇所は直後に掲載紙面ないしは頁数を日本語または欧文で示すこととする。関係の程度が比較的希薄な文献については、註で通常に表示する。

1900-11-26：藤島了穩「巴里近信 第一 萬國宗教歴史會の状況 第二 嗣法猊下及日野連枝」『教海一瀾』第81号、26～30頁。

1902-07-05：（無記名）「外國人の眼に映ずる本願寺」『中外日報』3面〔シー、エル、ブラウナル〕。

1902-08-22：(Anonym.), “Mr. K. Otani...”, 『The London and China Express (新聞紙)』, Vol.XLIV, No.2037, p.674.

1902-09-//：(Anonymität), “Herr Graf Kōzui Ōtani”, *Ost=Asien*, V. Jahrgang (6), No.54, S.253 [“Vermischtes 雑報” (Redaktionsschluss : 28. August)の一部; 随員 “Watanabe, Honda, Inouye und Hori”; 合流予定者 “Sonoda” “Hino” “Fujii”].

1902-09-11：(A correspondent), “Japanese Exploration in Central Asia”, *The Times*, p.12.

1902-09-12：(A correspondent), “Japanese Exploration in Central Asia”, 『The London and China Express

- (新聞紙)』, Vol.XLIV, No.2040, Supplement p.4.
- 1902-09-15a : C. L. B., “The Japanese Archæological Expedition”, 『*The Anglo = Japanese Gazette* (日英新報)』, Vol.I, No.3, pp.37-38.
- 1902-09-15b : (Anonym.), “Our London Correspondence [Count Otani…]”, *The Manchester Guardian*, p.4 [冒頭: “By Private Wire, London, Sunday Night”].
- 1902-09-19 : (Anonym.), “Count Otani...”, 『*The London and China Express* (新聞紙)』, Vol.XLIV, No.2041, p.738 [“Home Intelligence.”の項].
- 1902-10-23 : (無記名)「大谷光瑞師の中央亞細亞探検」『國民新聞』2面 [前半は独自記事か、後半は年月日未記載の「タイムズ」から抄訳].
- 1902-11-05 : (無記名)「嗣法猊下に對する英字新聞」『教海一瀾』第149号, 12頁。
- 1903-11-/- : (Anonym.), “Japanese Expedition to Chinese Turkestan”, *The Geographical Journal*, Vol.XXII, No.5, pp.566-567.
- 1906-/-/- : C.L.Brownell, “Hongwanji and Buddhist Protestantism in Japan,” 『*Transactions and Proceedings of The Japan Society London* 倫敦日本協會雜誌』Vol.VI (1901-1904), pp.68-87 [1902年4月9日講演].
- 1906-12-01 : 島地大等編『文學士藤井宣正遺稿 愛蔵全集』森江書店 [512～517頁:「滯歐手記の一節」].
- 1909-03-13 : (無記名)「ヘデキン博士両親の謝状」『龍谷週報』第3号, 15～16頁。
- 1912-08-07 : 橘瑞超「中亞探検旅行記 (四十六)」『大阪毎日新聞』1面 [改題再録 = 1912-12-28, 179～183頁].
- 1912-12-28 : 橘瑞超『中亞探検』博文館 [再録 = 1937-04-10, 731～799頁, 復刻 = 1988-09-20; 現代語訳文庫化 = 1989-06-10].
- 1915-06-01 : 大谷光瑞「序」香川黙識編『西域考古圖譜』上卷, 國華社, 1～4頁 [復刻 = 1972-12-05].
- 1936-03-01 : 小川琢治「一地理學者の生涯 [一五]」『地理教育』第23巻第6号, 57～64頁 [再録 = 1941-12-19, 135～145頁].
- 1936-04-01 : 小川琢治「一地理學者の生涯 [一六]」『地理教育』第24巻第1号, 64～70頁 [再録 = 1941-12-19, 145～155頁].
- 1937-02-06 : 芳賀檀編『芳賀矢一文集』富山房。
- 1937-04-10 : 上原芳太郎編『新西域記』上卷・下卷, 有光社 [復刻 = 1984-11-12].
- 1939-08-01 : 上原芳太郎「蒙疆探検紀行抄 (3)」『大乘』第18巻第8号, 60～65頁。
- 1940-06-30 : 蘭田香勲編「蘭田宗恵歐米印日録 (四)」『顯眞學報』第29号, 86～96頁 [改題再録 = 1975-01-03, 45～59頁].
- 1940-09-30 : 蘭田香勲編「蘭田宗恵歐米印日録 (五)」『顯眞學報』第30号, 85～94頁 [改題再録 = 1975-01-03, 59～73頁].
- 1941-12-19 : 小川琢治『一地理學者の生涯』小川芳樹刊。
- 1963-/-/- : Jack A. Dabbs, *History of the Discovery and Exploration of Chinese Turkestan*, The Hague.
- 1964-03-/- : 芳村修基「上海時代の鏡如上人」太田淳昭序『鏡如上人芳躅』本願寺, 27～37頁。
- 1972-12-05 : 香川黙識編『西域考古圖譜』上卷, 柏林社書店。
- 1973-08-15 : 仁本正恵『本願寺の明星 大谷光瑞上人の生涯』神戸別院慶讃法要事務所 [再録 = 1978-04-15, 201～250頁].
- 1975-01-03 : 蘭田香勲編『蘭田宗恵米國開教日誌』法藏館。
- 1978-04-15 : 倉田整治編『大谷光瑞上人生誕百年記念文集』瑞門会。
- 1980-/-/- : Peter Hopkirk, *Foreign Devils on the Silk Road*, London.
- 1984-11-12 : 上原芳太郎編『新西域記』上卷・下卷, 別冊, 井草出版。

- 1986-12-30：片山章雄「大谷探検隊関係記録拾遺Ⅴ」『(季刊)東西交渉』第5巻第4号(通巻20号), 30～36頁。
- 1987-06-12：松井京子「世界の中の関西⑤ 宗教編 大谷探検隊 経典・仏画に狙い 求道へ燃やす情熱」『朝日新聞』(大阪本社版)夕刊4版7面[再録=1990-04-05, 88～91頁]。
- 1987-08-01a：片山章雄「大谷探検隊(1902～1914)」金子民雄・田村俊介・広島三朗・片山章雄・水野勉共著『中央アジア探検家列伝』日本山岳会海外委員会, 91～112頁。
- 1987-08-01b：片山章雄「大谷探検隊とその将来品2」『小さな蕾』No.229, 94～101頁。
- 1988-09-20：橋瑞超『中亜探検』(明治シルクロード探検紀行文集成第23巻)ゆまに書房。
- 1989-06-10：橋瑞超『中亜探検』(中公文庫M417)中央公論社[現代語訳文庫化]。
- 1990-04-05：朝日新聞大阪本社学芸部『世界の中の関西 メディア・学術・企業』東方出版。
- 1991-01-07：(無記名)「佛教東漸<1>西域に行く 大谷光瑞と西域探検 中国の先達の足跡へ熱い夢」『京都新聞』7面[再録=1992-08-12, 37～43頁]。
- 1991-03-01：津本陽「天の伽藍<28>」『産経新聞』朝刊10版15面[大谷光瑞とヘディンの会見を描いた記述は3月7日まで継続, 再録単行本とその文庫版では一括削除]。
- 1991-03-30：白須浄眞「マイルスとハンメルベックに宛てた渡辺哲信の電文のメモについて——渡辺哲信『西域旅行日記』の調査より——」『東洋史苑』第37号, 1～24頁。
- 1991-06-12：片山章雄「ヨーロッパの探検王ヘディンと若き光瑞はいつ, どこで出会ったか」『太陽』第29巻第6号(NO.360), 80頁。
- 1992-05-05：フロンティア探偵団編『冒険・探検』(青春BEST文庫)青春出版社[32～33頁:「大谷探検家ヘディンと大谷光瑞はどこで会ったか?」]。
- 1992-08-12：京都新聞社編『佛教東漸 シルクロード巡歴』京都新聞社。
- 1992-12-25：白須浄眞『忘れられた明治の探検家 渡辺哲信』中央公論社。
- 1993-02-18：白須浄眞「一枚の写真に見る明治——「大谷探検隊」をめぐる」『中國新聞』17面。
- 1994-04-20：白須浄眞「高校教科書に「大谷探検隊」が初登場 経過と背景について」『本願寺新報』2面。
- 1994-05-18：本多隆成『大谷探検隊と本多恵隆』平凡社。
- 1995-03-10：白須浄眞「地球人列伝 VOL.5 渡辺哲信 タク라마カンを渡った明治の探検家」『FIELD & STREAM』第9巻第3号(通巻第99号), 34～37頁。
- 1996-08-01：白須浄眞「大谷探検隊——その歴史学的認識への試み——」『(季刊)あうろーら』1996年夏・創刊4号, 100～109頁。
- 1997-09-//：王平先「大谷光瑞・中亜探検・佛学研究」『西北史地』1997年第3期(總第66期), 82～86頁。
- 1998-06-08：白須浄眞「大谷探検隊とその時代=6=「タイムズ」の報道 驚嘆し隊員の業績を逐一紹介」『中國新聞』9面。
- 1998-06-15：白須浄眞「大谷探検隊とその時代=7=スタインの成果 古代仏教文化の存在を明かす」『中國新聞』9面。
- 1999-10-23a：白須浄眞「大谷探検隊とその時代」『モダニズム再考 二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館, 140～146頁。
- 1999-10-23b：片山章雄「大谷探検隊と二楽荘」『モダニズム再考 二楽荘と大谷探検隊』芦屋市立美術博物館, 147～167頁。
- 1999-11-08：(無記名)「余録」『毎日新聞』13版朝刊1面。
- 2001-03-15：篠崎陽子「堀賢雄氏(M.Hori)直筆英文史料“The Lob-Nor. N. Przhevalsky & S. Hedin.”(Oxford, 9. June 02.)について」『龍谷史壇』第115号, 横1～44頁。
- 2001-04-20：片山章雄「大谷探検隊の足跡 未紹介情報と蒐集品の行方を含めて」『(季刊)文化遺産』第11号, 30～33頁。

註

- 1) 大谷光瑞の「英国留学」は、特に問題のある表現ではないが、特定の教育機関に留学したわけではないので、「滞在」のような表現から「巡遊」のような表現までさまざまある。註6)も参照。
- 2) 随従者や欧州留学生とここでのいうのは、渡欧順(出発年月)で示すと、本多惠隆(1899年[推定10月])、渡邊哲信・日野尊寶(以上1899年12月)、堀賢雄(1900年5月)、藤井宣正・園田宗恵(以上1900年12月[後者は米国から])、井上弘圓(1901年7月)の7名を指す。
- 3) この年は4月7日に慶應と改元されているので、白鳥庫吉誕生の2月4日は元治2年と考えられるが、管見の限り白鳥の年譜等では慶應元年と表記しているため、ここでは併記しておく。
- 4) 大谷光瑞のロンドン出発は、隊員の日記などから1902年8月16日で動かないが、後に大谷光瑞本人が「八月十五日倫敦を出發」(1915-06-01, 1頁[復刻=1972-12-05, 1頁])と書いたため、これに依拠した文献もある程度出現している。これは単純な誤りであって採らない。
- 5) 渡欧の途次については、日録が半ばまでであるが詳細に研究されておらず、インド以西エジプト・イタリアの記録もあるが、それらを利用した研究は皆無のようである。ロンドン到着は筆者の最近稿で1900年3月19日と示しておいた(2001-04-20, 30頁)。これも細かな記録の対校や誤植の背景の考察が必要と考えられる。併せて別稿において論じる予定である。滞欧中に関しても、大谷光瑞を軸にして随従者・留学生の記録を重ねれば、ほぼ毎月の単位でかなりの動向が判明する。記録には各界名士との関係を示すものも少なくないので、機を見て別稿で扱う予定である。
- 6) 大谷探検隊という呼称は、現時点での呼称として何ら問題ないと思うが、時間軸の中で活動が何と呼ばれて記録され、その組織・隊が何と呼ばれ記録されてきたか、また大谷光瑞本人や隊員がどのように記録しているかという問題については、なお検討の余地がある。筆者の最近稿において『オオタニミッション』の訳が『大谷探検隊』との言もあるが、ここで光瑞の漢文中での『探検』、米月刊誌の文中での在英を『スタディ』、踏査活動を『本願寺エクスペディション』とする用語を指摘しておきたい(2001-04-20, 30頁)とだけ指摘しておいたが、これについても英語・日本語・漢語の記録が相当数ある。少なくとも「ミッション」が訳され「探検隊」となったというような解釈(1996-08-01, 103~104頁; 1998-06-08, 9面; 1999-10-23a, 140頁)は、その根拠・出典が一度も示されていないことが象徴するように、極めて危ういか誤った解釈である。これについても別稿で詳細に扱う。
- 7) 後段で扱うように、この文献は『ザ・タイムズ』の記事を翻訳引用したような書き方をしながら、実は別の記事を扱っている。
- 8) 筆者が「Inongo」は正しくは「Inouye」と推測して以後現時点まで、井上を「Inouye」とする肉筆ものを複数見たが、それらの資料が個人蔵であることもあって使用しなかった。8月28日締め月刊誌雑報欄の一文に「Inouye」とあって9月に刊行されたものがある(1902-09-//, S.253)。これを筆者の最近稿で図版として示す予定だったが、スペースの関係で不可能となり、『ザ・タイムズ』の図版に付した解説中で月刊誌記事の存在のみ言及した(2001-04-20, 31頁)。近年では、山崎一雄「大谷探検隊橋瑞超が1909~1911年カジュアルで得たガラス片などの化学成分について」『古文化財の科学』第34号、1989年、53頁に「K. Inouye」とある。なお、上記推測を公表した一文中で、『ザ・タイムズ』の記事に関して『『ザ・タイムズ』による直前の取材』と書いたがこれはよくなく、少なくとも『『ザ・タイムズ』の通信員による直前の取材』とすべきだった。撤回・訂正したいところだが、現時点における解釈は本稿後段で述べるとおりである。
- 9) 筆者の最近稿で「出発はエドワード七世戴冠式参列後とされ、延期された式の一週間後、日本艦浅間・高砂も加わったスピットヘッド観艦式の一六日土曜というロンドン子も気懸りな日だった。」と述べておいた(2001-04-20, 30頁)。当初戴冠式は6月26日の予定だったが王の盲腸炎と手術で延期された。光瑞の出発も当初は7月の予定だった。
- 10) この誤りは、後に述べるように原稿が手書き筆記体だったことを推測させる。

- 11) 賢雄を「ますお」と読むことについては、筆者自身は『ザ・タイムズ』紹介時(1986-12-30, 30頁)以後そのような読みを考えており、『図書新聞』1987年6月27日5面に筆者の解釈が紹介されている(金子民雄執筆書評)。1987年6月3日の講演では「ますお」の読みをある程度強調しておいた(1987-08-01a, 103頁)。堀賢雄については篠崎論文(2001-03-15, 横1~44頁)も参照。
- 12) ダブズの著書(1963-/-/-)。日本語抄訳「東トルキスタン探検史」があるが、今はこれ以上触れない。
- 13) ホップカークの著書(1980-/-/-)。日本語訳『シルクロード発掘秘話』, 中国語訳『絲綢路上的外国魔鬼』があるが、今はこれ以上触れない。
- 14) “Home Intelligence.”の項にある。全文は“Mr. K. Otani, a distinguished traveller and geologist, left Victoria on 16th inst. for the Continent. Members of the Japanese Legation were present at the station.”である。
- 15) あるいは, “Inouye Koyen”である可能性もある。
- 16) この倫敦日本協会は、問題にしている『ザ・タイムズ』の記事の翻訳中において「日本クラブ」(1992-12-25, 154頁)とされたことがあったが、誤りである。協会の出版物の表紙に明記があるし、コータツティ&ダニエルズの編著の訳書『英国と日本 架橋の人びと』(思文閣出版, 1998年)の各所およびその原著を参照。
- 17) 倫敦日本協会のペーパーでは“Shinshu”と正しく綴り、親鸞の生没年も西暦で記入している(1906-/-/-, p.69)。また、西本願寺派遣の留学生について言及した箇所では, “One of the young men thus to go was the Count's own son, OTANI Kozui, who is now a F.R.G.S., and I am glad to say, a member also of this society.”と大谷光瑞がR.G.S.のFellowであることに言及している(1906-/-/-, p.71)。
- 18) 松本康正「東京専門学校で教えた一六人の外国人講師たち」『早稲田大学史紀要』第10巻, 1977年, 93~94頁。早稲田大学大学史編集所編『早稲田大学百年史』第一巻, 早稲田大学, 1978年, 1041頁も併照。
- 19) 『富中富高百年史』富山高等学校創校百周年記念事業後援会, 1985年, 72~74頁。
- 20) *Who was who in America*, Vol.I, Chicago, 1968, p.153 他。なお, *Who was who*に見える著作 Hongwan-ji at Home and Abroad, 1902 は鋭意探索したが、現在まで未見である。
- 21) 高瀬重雄「お雇い教師ブラウネルについて」『富山史壇』第67号, 1977年, 33~43頁。エンサイクロペディア・アメリカナを使用。
- 22) 1991年10月8日の『朝日新聞』朝刊全国版および各地方版, 同日夕刊各紙, 他。「盗作」の語は『週刊時事』第33巻第43号, 1991年11月16日, 34頁。後の単行本・文庫では該当部分を削除したが別の誤りが混入している。著者によって大谷光瑞とヘディンの会見の問題は深化させられていない。
- 23) アイルランド人のDeasyのカタカナ表記は多様であるが、ジョイスの『ユリシーズ』に同綴の人名が登場することを聞き知ったので、日本での諸種の表記を勘案し定着していると考えられる「ディージー」に従った。当人H. H. P. Deasyに関しては、すでにJ・ミルスキー、杉山二郎他訳『考古学探検家スタイン伝』上, 六興出版, 1984年, 154, 195, 398, 402~403頁に「ディージー」の表記がある。
- 24) 探検終了、帰国から間もないディージーのR.G.S.での報告(4月12日)は*The London and China Express*, Vol.XLII, No.1914, April 13, 1900, Supplement p.3に, 5月21日にR.G.S.でFounder's medalが授与されたことは*The London and China Express*, Vol.XLII, No.1920, May 25, 1900, p.403にある。著書と巻頭のディージーの写真は、筆者の最近稿の図版(2001-04-20, 31頁)参照。
- 25) 手許の複写は一部鮮明を欠くので図版提示を見送り、移録した全文を示しておく。ただし、改行箇所“/”を加え、本文で直後に言及する*The London and China Express* (1902-09-19, p.738)に再録された部分にアンダーラインを施す。

Count Otani, who recently left London at the / head of an expedition of Japanese scholars in / search of Buddhist remains in Central Asia, has / been well known in London society during the / past two or three years. As brother-in-law of / the Crown Prince of Japan and heir to the head- / ship or abbacy of the most powerful and / wealthiest ecclesiastical body in the country, all / doors were thrown open to him. He was not, / however, disposed to allow himself to be lionised. / Not that he was anything of the cloistered re- / cluse. On the contrary, he thoroughly enjoyed / bicycling about England and the Continent with / one of his suite, and most theatres in London / saw him frequently. But he was fond of the / study of geography and exploration, especially / in Asia, and would travel to Berlin or Vienna / in order to see the latest traveller from that / continent or talk with some veteran like / Professor Vambéry. As to the success of his / errand, I think Oriental scholars here are dis- / posed to doubt whether much that is valuable, / in Turkestan at any rate, has escaped the / attention of Russian and Indian Investigators, / while amongst the monasteries of Mongolia there / is room for important discoveries in the history / and doctrines of Buddhism of the Northern / Canon, which is adopted by China, Japan, and / Thibet. Count Otani's passport expressly ex- / cludes Thibet, but I believe he will, neverthe- / less, attempt to enter that country from the / Indian side, and it is possible that his position / in the Buddhist ecclesiastical hierarchy may / assist him in dealing with the Lamas who govern / Thibet, and may induce them to treat him very / differently from other foreigners. It would be / curious if a Japanese traveller were to be the / first in the new century to visit the mysterious / Lhasa.

This journey of Count Otani, it is interesting / to note, is only one of many indications of the / revival of Buddhist activity in Japan. Although / officially discountenanced and in the cold shade / of tacit disapproval and contempt with the / upper classes in Japan for very many years — / perhaps for two centuries or more, — it always / maintained its hold on the people. In recent / years the Government deemed it necessary to / interfere to some extent in order to see that the / endowments were honestly employed and to have / a voice in the election of the heads of the sects, / but practically Buddhism is free from State con- / trol. Very many of its leaders are men of learn- / ing and of what Mr. Gladstone used to call / “statesmanlike minds.” They have sent con- / siderable numbers of the younger priests abroad / to study Western literatures and religions ; and / quite recently they despatched missionaries to / Korea and China, where many of them have had / great success. At the present moment they are / organising a great Congress of representatives / of Buddhism from every part of Asia and of / Hinduism, to meet in Tokio, and have sent a / delegation, which is at this moment in India, to / explain the aims of the Congress and to invite / Buddhists and Hindus to attend. Max Müller / has described Buddhism as one of the three / great missionary religions of the world. It / certainly bears this character in modern Japan, / though after a long period of slumber and of / contempt.

- 26) この記事では「大谷伯は、中央アジアの仏教研究のために、今回学生を率い、倫敦を出発したるが、二三年倫敦にありて暇あれば、随員と共に英国およびヨーロッパ、自動車を駆りて傍ら、風俗をさぐれり。久しく亜細亜の地を踏み仏教興衰の跡をさぐらん志ありたれば、乃ち今回の行ありしなり」（タイムズ紙1902・9・11付）としており、再録は読点1箇所を除いて同文となっている。しかし『ザ・タイムズ』の記事とも、それを伝えた邦字紙（1902-10-23, 2面）とも、一致しない。おそらく「英字新聞」を紹介した雑誌記事（1902-11-05, 12頁）からそれを『ザ・タイムズ』の記事と錯覚して紹介したのであろう。その雑誌における紹介全文を掲げておく。

「我嗣法親下の外遊に對し、近着の一英字新聞は記して曰く、大谷伯は中央亞細亞の佛教の爲に、今回學生を率ひ倫敦を出發せられたるが、伯は此の二三年倫敦に在て、廣く人に識られ、其の日本皇太子殿下の義兄弟且は日本の最も勢力あり、最も富裕なる、法團の新法主と云へは、自から

社會各方面より歓迎せられしも、威厳自ら持し、人々の爲めに擔ぎ廻るゝを許さず、暇あれば則ち隨員と共に、英國及び歐洲大陸に自轉車を驅りて、旁ら風俗を搜れり、久しく亞細亞の地を踏み佛教興衰の跡を搜らん志ありたれば、乃ち今回の行ありしなり、伯の旅券に西藏を除きたるは、別に印度境上の道を取て之に入らん趣意なるやに聞けり、西藏は喇嘛の管下に在れば伯が日本宗教界に於ける、地位は自ら彼等をして、襟を正して迎へしめ、將來に好關係を開かしむるものあらん、此の行は實に日本佛教の新活動の一例とも見るべきものなり、近年日本政府は諸宗管長の選舉に多少干渉するを必要とせしも、事實に於ては、佛教は殆んど國家の管督を受けざるなり、マクスミューラー博士は、佛教を世界三大宗教の一に算へしが日本佛教今日の活動は正しく其の一大宗教たるを恥かしめざるものなり云々」

付記1 本稿における引用文中の読点は、紀要の掲載形式に合わせたためすべて「,」に変更している。また、引用箇所の一部の漢字は新字になっている。

付記2 本稿の細部に関して、三佐川亮宏、山口洋、吉田文彦諸氏のご教示を得た。記して感謝する。

付記3 何度も言及した筆者の最近稿（2001-04-20, 30～33頁）の誤りを訂正しておく。33頁写真7の解説4行目：『新疆探検記』→『新疆探險記』, 33頁下段22行目：旅順博物館蔵→博物館蔵。